ミュージアム通信

展覧会のお知らせ

■常設展示

小川原脩展　「私の中の原風景」

アジア各地を旅し、自らの原風景を再発見した小川原脩。大いなる自然と素朴な人々の暮らし、動物たちとの対等な関係など、幼少の頃を過ごした北海道開拓期と重なる世界観を展開する作品群を中心に、画業全体の根底に流れるイメージの原型を探ります。

会　期：開催中～8月4日㈰　　会　場：第1展示室

■企画展示

小川原脩セレクション「花と鳥（からす）-1940′s」

シュルレアリスム（超現実主義）運動に身を投じた1940年代初頭から、戦争へと傾斜する時代を背景とした創作の変容まで、激動の1940年代をクローズアップします。

会　期：開催中～7月7日㈰　　会　場：第2展示室

小川原脩記念美術館　☎21-4141

観覧料：一　　般　500円（400円）
　　高校生　300円（200円）
　　小中学生　100円（50円）

倶知安風土館　☎22-6631

観覧料：一　　般　200円（100円）
　　高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は9時～17時
　入館は16時30分まで
※（　）内は10名以上の団体料金
6月の休館日　毎週火曜日

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

世界美術館紀行Ⅲ～イタリア編～
「ウフィツィ美術館／ピッティ宮殿・パラティーナ美術館／ボルゲーゼ美術館」

4月からの新企画。お話しと映像で世界の美術館を訪ねます。

日　時：6月1日㈯14時～15時30分
お話し：柴　　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

アート探訪くみて・きいて〉31「ゴヤ～魅惑のマハ」

「着衣のマハ」と「裸のマハ」。そのモデルの真相を紐解きながら、ゴヤの人間像に迫ります。

日　時：6月8日㈯14時～15時
お話し：柴　　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

アート・トーク「小川原脩この一点～花と鳥（カラス）1941年頃」

残された図版資料から読み解く、作品に隠された秘密。小川原脩が描き替えた作品の謎に迫ります。

日　時：6月29日㈯14時～14時30分
お話し：沼田絵美（当館学芸員）　会　場：当館映像ルーム（無料）

■ミュージアム・コンサート

「マリンバ＆ピアノ コンサート～世界音楽紀行」

倶知安生まれで、東京を拠点に国内外で活躍する井原由加子さんのマリンバをお楽しみください。

日　時：6月15日㈯14時～15時
出　演：デュ・クルール（井原由加子さん（マリンバ）／根岸花恵さん（ピアノ））

■アート・シネマ館

「ディオールと私」2014年/90分/フランス（字幕）

世界的ブランドとなったディオール。その舞台裏に迫る感動のファッション・ドキュメンタリー。

日　時：6月22日㈯14時～15時40分　お話し：柴　　勤（当館館長）
会　場：当館映像ルーム（無料）

珈琲（たしな）を嗜み 美術を楽しむ

カフェギャラリーとでも呼ぶのでしょうか、カフェとギャラリーを結びつけたようなお店を見掛けることがあります。私は大のコーヒー党ですから、そのようなお店に出くわすと躊躇（ちゅうちょ）なく飛び込みます。札幌では行きつけのお店が、少なくとも5～6軒はあるかも。

カフェの壁面を活用しているお店から、本格的にギャラリーを設けているところまで形はさまざまですが、気軽に展覧会を見られるのが一番です。また、何か仲間内の安心できるような雰囲気も漂っています。倶知安にも、そんなカフェがあると良いですね。

館　長　柴　勤（つとむ）

感動の場 ー点

『北海道移民史（士族移民時代）』
1943年　小川原　脩　画

先月号で、「北海道移民史（屯田兵時代）」を紹介しました。もうひとつの開拓移民を描いた作品が「北海道移民史（士族移民時代）」です。ここに描かれた人々は、明治期の十勝開拓の先駆けである「晩成社」の一団と思われたので、専門家の帯広百年記念館・大和田学芸員に本作図版を見てもらったところ、作品のモデルになった写真の存在を教えていただきました。まさしく画面中央の着物に赤い羽織を着た男性は依田勉三、その右隣は渡辺勝という人物、そして身に着けた衣服や刀を持つポーズまで一致しています。どうやら、帯広の移住先に到着し、右端の人物の仕草のとおり「草鞋（わらじ）を脱ぎ」（旅を終えること）、アイヌの居住地・コタン付近に住まいを構えたという史実を元にした場面のようです。

昭和初期には、依田勉三の事績や開拓精神といったものが満州開拓の呼び水として利用されたこともあり、当時、小川原がなぜ北海道開拓という題材を選び描いたのかが浮かび上がってきます。今後、「晩成社」に関する書物などに接点があったかどうか、小川原が遺した膨大な蔵書をしっかりと調査する必要がありそうです。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

―腹先白いマルハナバチ―

434回

少し前まで山野を彩っていた春の植物は姿を隠し、濃い緑が目にまぶしい季節になってきました。そんな森の中を、全身が黄色やオレンジ、黒の毛に覆われているマルハナバチの仲間たちが花から花へとせわしなく飛び回っています。ハチと植物の共生する素敵なシーンのようですが、もしも、その中に腹部の先が白いハチがいたらご用心。それは外国から来たセイヨウオオマルハナバチかもしれません。

セイヨウオオマルハナバチは1991年、温室栽培トマトの授粉用としてヨーロッパから導入されましたが、1996年頃に逃げて野生化。その繁殖能力の高いことや、他種よりもエサ取りの競争に強いことから分布を広げており、すでに後志地域でも倶知安町を含む6市町で確認されています。

植物とハチはギブ＆テイクの関係にあり、植物はハチに蜜を与え、ハチは授粉の手伝いをしています。しかし、マルハナバチの中でも特に舌の短いセイヨウオオマルハナバチは花の裏側に穴を開けて蜜を吸う「盗蜜」をします。裏から蜜を吸うハチに花粉はつかず、授粉の助けにはなりません。蜜だけを奪われた花は授粉の機会を失い、他のマルハナバチたちも蜜を得られません。これが続けば、いずれ多くの生き物たちが姿を消していくことになるでしょう。

四季折々で私たちを癒してくれる自然を守るにはどうするべきか、考えていく必要があります。

文：小田桐　亮（倶知安風土館　学芸員）

▲花を訪れたセイヨウオオマルハナバチ

※北海道では、セイヨウオオマルハナバチバスターズという防除活動も行っています。倶知安町やその周辺で成虫や巣を見かけた場合には、倶知安風土館（☎22－6631）か、後志総合振興局（☎23－1354）へご連絡いただけますと幸いです